

幼児の対人葛藤場面における解決方法と社会的地位

一人形を用いた実演反応と言語反応の比較

筑波大学大学院(博)心理学研究科 小林 真

筑波大学心理学系 高野 清純

Interpersonal conflict resolving strategies and sociometric status in young children: A comparison of enactive and verbal responses

Makoto Kobayashi and Seijun Takano (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

Abstract

One hundred thirty-nine young children were interviewed using hand puppets, and their enactive and verbal responses (i.e., how they behaved at hypothetical interpersonal conflict situations) were collected. Additionally a sociometric interview was administered. In the sociometric interview, children were asked to nominate three as best friends and three as not friends, and to rate all same-sex classmates for liking/disliking on a three-point scale. Log-linear analysis indicated that children who verbally responded positively to interpersonal conflict situations were not disliked by their classmates, but those who responded negatively are disliked by their classmates. So it would be concluded that children's verbal responses reflect their knowledge of cooperative resolution strategies in interpersonal conflict situations.

Key words: enactive responses, interpersonal conflict, peer relations, social competence

問題と目的

乳幼児の仲間に対する対人行動は、注視、接触のような単純な動作に始まる(Field & Roopnarine, 1982)。やがて、相手の動作を模倣したり補足することが契機となって協同遊びへと発展していく(Eckerman, Davis, & Didow, 1989; Eckerman & Didow, 1989; 中野, 1988)。しかし実際の遊びにおいては、遊びのテーマ・方法をめぐって子ども同士の対立が頻繁に生じる。幼児の遊びの観察研究では、おもちゃの取り合いや、ごっこ遊びにおける役割の取り合いが生じることが報告されている(木下他, 1986; 小林, 1989; 内田・無籐, 1983)。Shantz(1987)は、このような対立が生じ、持続する状態を対人葛藤(Interpersonal Conflict)と呼んでいる。本研究に

おいても、子ども同士の間で生じるこうした対立を対人葛藤と呼ぶ。

それでは、遊びの最中に生じる様々な対人的な葛藤を、子どもたちはどのように解決しているのだろうか。また、その解決方法は実際の仲間関係とどのように関連しているのであろうか。

Selman & Demorest(1984)は、視点取得の発達という観点から解決方略(Interpersonal Negotiation Strategy)を分類している。視点取得の発達に伴い、自己と他者の欲求を理解し、双方の利害を考慮した解決が可能になる、というのがSelmanらのモデルであり、日本の小学生においてはこのモデルが検証されている(金城・梅本, 1991)。

しかし就学前児(または幼稚園児)では、必ずしも双方が満足できる解決が行われるとは限らない。

Bakeman & Brownlee(1982)は、子ども同士のおもちゃの取り合いを観察し、多くの場合先に所有していた方が争いに勝つと報告している。したがって、幼児の場合は対人葛藤場面において、譲らないことが日常的に見られるといえよう。さらにShure(1982)は、4歳児は一般に、対人葛藤場面において相手をぶったりおもちゃを取ったりすることが多いと報告している。しかしShure(1982)はまた、集団に適応している子どもは、対人的問題解決課題においては相手に対して強制的でない方法を思いつくことができるとも述べている。

これらの研究から、仲間関係の良好な子どもとそうでない子どもでは、仮に実際の葛藤場面における行動にそれほど差がみられなくても、その判断過程に違いがあるのではないかと考えられる。結果的におもちゃを取ったり相手に攻撃を加えることになろうとも、対人葛藤場面で状況認知ができる子どもは、仲間集団に適応しやすいのである。本研究の目的は、こうした知見に基づいて、対人葛藤場面における幼児の解決方法に関する判断が、仲間関係と関連しているかどうかを検討することにある。

本研究は小林・庄司(1992)のデータを用い、仮想の対人葛藤場面における子どもの反応が、ソシオメトリックテストで測定された社会的地位とどのように関連しているかを検討するものである。

方法

被験者

被験者は、茨城県T市内の公立幼稚園児139名(4歳男児40名、女児41名、5歳男児34名、女児24名)である。なお、予備実験に同じ幼稚園の園児13名(4歳男児4名、女児2名、5歳男児4名、女児3名)が参加している。

手続き

(1) 対人葛藤場面における反応の測定

自由遊び、および通常の保育活動の時間中に、園内の別室で個別面接が行われた。テレビの画面上で上演される人形劇によって2つの対人葛藤場面が提示された。面接では、言語報告と人形を用いた演技の二種類の反応が測定された。子どもの反応はビデオ録画され、後に分析された。提示された刺激の例をFig. 1に、実演法による測定の様子をFig. 2に示す。なお、対人葛藤場面における子どもの反応の測定は、小林・庄司(1992)に報告済みであるので、詳細な手続きはここでは省略する。

(2) 社会的地位の測定

対人葛藤場面の反応測定から約3カ月後に、同じ

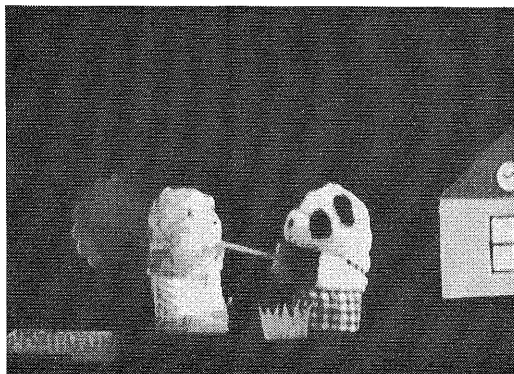


Fig. 1 ビデオにより提示された対人葛藤場面(女児用：場面1)



Fig. 2 実演法による反応の測定の様子

部屋で個別面接によってソシオメトリーのデータが収集された。ソシオメトリーは、まず同じクラスの同性の仲間についての指名が行われ、続いて3件法による評定が実施された。具体的な手続きは以下の通りである。

指名法 ソシオメトリーの指名では、まず指名の対象者を確認するために、同じ組の同性の仲間の名前を全て挙げさせた。途中で思い出せなくなった場合には、実験者が残りの子どもの姓をランダムに挙げ、名前を確認させた。

続いて肯定的な指名が行われた。「今教えてもらったお友達の中で、いちばん仲良しは誰ですか」「まだ他に仲良しのお友達はいますか」と尋ね、3名を指名させた。3名以上挙げた場合は、最初の3名がデータとして使用された。

次に否定的指名が実施された。「あんまり仲良し

でないお友達や、好きじゃないお友達はいますか」と問い、3名まで指名させたが、子どもが「もういない」と答えた場合には、3名に満たなくともその時点で打ち切られた。

評定法 まず、3点の評定尺度の手がかりとなる絵カードが子どもに提示された。これは、子どもが笑っている顔、普通の顔(特に表情の無いもの)、怒っている顔の3枚の絵からなっている。男児に対しては男の子の顔が、女児に対しては女の子の顔が提示された。

続いて、「これから〇〇組のお友達の名前を言いますから、もしそのお友達が仲良しのお友達だったらこのニコニコの顔を指さして下さい。もしあまり仲良しでなかったら、こっちのプンプン怒った顔を指さして下さい。もし仲良しでも嫌いでもなかったら、真ん中の普通のお顔を指さして下さい。」と教示を与え、実験者がランダムに挙げた仲間の名前について、該当する絵を指示させた。

結 果

社会的地位の算出

本研究で扱う社会的地位という概念そのものについては、基本的にはソシオメトリー指名法に基づいた Coie, Dodge & Coppotelli(1982)の分類に準拠している。しかし被験者の人数の問題もあり、以下では指名法と評定法を組み合わせた本研究独自の社会的地位の算出手続きが用いられた。肯定的指名数、否定的指名数、および評定値の標準得点に基づいて、以下のように社会的地位が算出された。

まず指名法により被選択数、被排斥数が求められた。次に肯定的指名、否定的指名のそれぞれについて、同じクラスの同性の集団における一人あたりの平均指名数が算出された。続いて、各個人の被指名数を平均指名数と比較し、以下の4つの地位に分類された。なお、ここで求められた社会的地位は、同じクラスの同性の仲間集団に基づいたものである。(英字の大文字部分を各地位の略号として用いる)。

- 1) 好かれる子ども (**Popular**): 肯定的指名数が平均より多く、否定的指名数が平均より少ない
- 2) 無視される子ども (**Neglected**): 肯定的指名数も否定的指名数も平均より少ない
- 3) 嫌われる子ども (**Rejected**): 肯定的指名数が平均より少なく、否定的指名数が平均より多い
- 4) 好かれたり嫌われたりする子ども (**Controversial**): 肯定的指名数も否定的指名数も平均より多い

しかしこの4分類では、平均的な子ども (**Average**)

Table 1 社会的地位の分布

地 位	人 数
Popular	25
Neglected	24
Rejected	16
Controversial	14
合 計	79

が上記の4群のいずれかに含まれてしまう。そこで、平均的な子どもを特定化するため、以下の手続きが使用された。まず3件法による評定値が同級・同性の仲間集団内で標準化された。続いて、評定値の標準得点(Z得点)が各々の集団において $-0.5 < Z < 0.5$ の間にある者(60名)が平均的な子どもとして同定された。平均的な子どもを除外した後の、4つの社会的地位に分布した被験者の数はTable 1の通りである。

対人葛藤場面の反応と社会的地位

面接で得られた実演反応、言語反応は、それぞれ以下の5つのカテゴリーに分類された(英字の大文字部分を略号として使用する)。

- 1) 対立の回避(**Avoidant**): 泣く、やめてしまう、わからない、等
 - 2) 自己中心的反応(**Egocentric**): スコップを譲らない、自分がやると言い張る、物別れ、等
 - 3) ステレオタイプな回答(**Stereotyped**): ごめんなさいと謝る、ケンカしちやだめと言う、等のケンカはいけないという回答
 - 4) 向社会的反応(**Prosocial**): 貸してあげる、〇〇役でいいと言う、等
 - 5) 社会的ルールの使用(**Rule-oriented**): じゃんけんで決める、順番にする、先に言った方が取る、等
- A, Eが社会的に未熟な反応で、P, Rが望ましい、より高次の反応であると考えられる。そこで以下の分析では、実演反応、言語反応ともに、A・E・Sが社会的に低次の反応、P・Rが高次の反応として合成され、この新たな分類に基づいて分析が行われた。

実演反応のパターンと言語反応のパターンから社会的地位が予測できるかどうかを分析するため、二つの場面についてそれぞれLog-linearモデルを用い、以下の手順にしたがってモデルの適合性が検討された。

まず、比較の対象とするモデルとして、地位の要因の主効果のみが仮定された(地位のみに関する独立モデル)。これに実演反応の分布、言語反応の分

Table 2 物の取り合いと社会的地位

地 位	言語反応			
	低次		高次	
	実演反応 低次	実演反応 高次	実演反応 低次	実演反応 高次
P	3	3	11	8
N	3	4	7	10
R	3	6	3	4
C	2	2	6	4

Table 3 役割の取り合いと社会的地位

地 位	言語反応			
	低次		高次	
	実演反応 低次	実演反応 高次	実演反応 低次	実演反応 高次
P	6	3	11	5
N	4	4	6	10
R	4	4	4	4
C	3	1	6	4

布の順に要因を加えた場合と、言語反応、実演反応の順に要因を加えた場合で、どの程度の適合度の増加がみられるかが検定された。

なお、子どもの地位、各反応のパターンの分布を、三次元のクロス集計表として Table 2, 3に示す。

物の取り合い場面 地位の要因によるモデルでは、 $\chi^2=17.02(df=12, p<.15)$ で、適合度は十分ではなかった。これに実演反応の要因を加えた場合は $\chi^2=16.91(df=11, p<.12)$ 、 $\Delta\chi^2=0.11(df=11, N.S.)$ で、適合度は向上しなかった。しかし、地位モデルに言語反応の要因を加えた場合は、 $\chi^2=7.61(df=11, p<.75)$ となり、 $\Delta\chi^2=9.41(df=1, p<.01)$ で、有意な適合度の増加がみられた(Table 4)。

なお、Table 2にみられるように、言語反応で高次な反応を示した子どもは、大部分が地位P、およびNに分布していた。これらの結果から、対人葛藤場面で望ましい社会的行動についての知識を有していた子どもは、仲間から嫌われることが少ないという傾向がみられる。

役割の取り合い場面 スコップ取り合い場面と同様に、役割の取り合い場面でも対数線形モデルによって検討が行われた。地位の要因のみのモデルの適合度は $\chi^2=13.15(df=12, p<.36)$ で、適合度は十分ではなかった。これに、実演反応の要因を加えた場合は、適合度は $\chi^2=12.12(df=11, p<.36)$ 、 Δ

Table 4 物の取り合い場面のモデル適合度

要因	χ^2 値	df	p
地位	17.02	12	<.15
地位+実演	16.91	11	<.12
$\Delta\chi^2$	0.11	1	(N.S.)
地位	17.02	12	<.15
地位+言語	7.61	11	<.75
$\Delta\chi^2$	9.41	1	<.01

Table 5 役割の取り合い場面のモデル適合度

要因	χ^2 値	df	p
地位	13.15	12	<.36
地位+実演	12.12	11	<.36
$\Delta\chi^2$	1.03	1	(N.S.)
地位	13.15	12	<.36
地位+言語	7.50	11	<.76
$\Delta\chi^2$	5.65	1	<.05

$\chi^2=1.03(df=1, N.S.)$ で、有意な増加はみられなかった。しかし、地位モデルに言語反応の要因を加えた場合は、 $\chi^2=7.50(df=11, p<.76)$ 、 $\Delta\chi^2=5.65(df=1, p<.05)$ で、適合度の有意な向上がみられた(Table 5)。

また、Table 3にみられるように、言語反応で望ましい社会的行動を答えた子どもは、P、Nに多く分布しており、仲間から嫌われることが少ないという傾向がみられた。

考 察

本研究では、対人葛藤場面における子どもの解決方法に関する判断と、仲間関係との関連性を検討することが目的であった。この点に関しては、Log-Linear分析によって、言語反応にみられる解決方略の産出と社会的地位との間に有意な関連性がみられた。二つの場面共に、言語的に望ましい回答をした子どもは、P群とN群に多く分布しており、仲間から嫌われにくいことが示されている。実演反応と仲間関係には、直接的な関連性はみられなかった。言語反応が社会的な知識を反映しているものであるならば、本研究の結果は Selman & Demorest(1984)や Shure(1982)の指摘と一致しているといえよう。す

なわち、対人葛藤場面において社会的に望ましい判断ができる子どもは、少なくとも仲間から拒否されてはいないのである。

ところで、今回の分析では、言語反応も実演反応も同じカテゴリーで分類し、比較検討を試みたが、実演反応における実際の子どもの行動は、どのような解決方法を選択したかという情報以外に、それをどのように主張したか、表情や声の調子はどのようであったか、といった様々な情報を含んでいる。したがって、解決行動が社会的に高次か低次かという判断以外に、それがどのように表現されたか(主張的かどうか)という観点から改めて分析する必要があると思われる。本研究の結果から、社会的に適切な知識を持っている子どもは仲間から拒否されることは少ないということが示されたが、友だちから積極的に受け入れられる子どもと、無視されがちな子どもの違いはどこに由来するのであろうか。そこにおそらく主張性という要因が影響してくるのではないだろうか。つまり、知識を持ってはいても、それを実際の場面で実行に移せるかどうかP群とN群の子どもの差異を生み出していると考えられる。その意味では、対人葛藤場面における子どもの反応を、Mize & Ladd(1989)の研究のように主張性と友好性という二つの観点から評価することが必要であるかも知れない。成人の主張行動に関しては、ロールプレイ場面において行動観察を用いた研究があり(Serber, 1972; Hersen, Eisler & Miller, 1974)、幼児の実演反応もロールプレイによる行動評価という観点から分析する必要がある。

将来は、子どもの認知的な判断と実際の行動、仲間関係、あるいは大人の評価、等の様々な角度から対人葛藤場面における解決行動を研究することが必要であろう。そして、協同遊びを進展させていく中で、子どもはどのように他者と協調することを学習していくのか、という社会的発達の重要な側面が次第に解明されていくことを期待する。

要 約

139人の幼稚園児が人形を用いて面接され、仮想の対人葛藤場面においてどのように振る舞うかに関する子どもの実演反応、言語反応が収集された。さらに、ソシオメトリックテストが面接により実施された。ソシオメトリーの面接では、子どもたちは3人の仲良しの友だちを挙げる、3人の仲良しではない人を挙げる、同性の級友について好き／嫌いに関する3点評定することが求められた。対数線形分析によって以下のことが明らかとなった。対

人葛藤場面において肯定的に反応した子どもは、級友から嫌われなかったが、否定的に反応した子どもは級友から嫌われていた。したがって、子どもの言語反応は、対人葛藤の場面における協調的な解決方略という知識を反映したものであると結論づけることができよう。

引用文献

- Coie, J.D., Dodge, K.A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 557-570
- Eckerman, C.O., & Didow, S.M. 1989 Toddler's social coordinations: Changing responses to another's invitation to play. *Developmental Psychology*, **25**, 794-804
- Eckerman, C.O., Davis, C.C., & Didow, S.M. 1989 Toddler's emerging ways of achieving social coordinations with peer. *Child Development*, **60**, 440-453
- Field, T.M., & Roopnarine, J.L. 1982 Infant-peer interactions. In Field, T., Huston, A., Quay, H.C., Troll, L. & Finly, G.E. (Eds.) Review of human development. New York: John Wiley & Sons. Pp.164-179
- Hersen, M., Eisler, R.M., & Miller, P.M. 1974 An experimental analysis of generalization in assertive training. *Behavior Research and Therapy*, **12**, 295-310
- 金城洋子・梅本堯夫 1991 児童における対人交渉能力の発達 発達研究, **7**, 115-134
- 木下芳子・朝生あけみ・斎藤こずゑ 1986 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決 埼玉大学教育学部紀要(教育科学), **35**, 1-15
- 小林 真 1988 幼児の遊びにおける対人行動の分析 埼玉大学教育学部幼児教育研究室(編)『乳幼児期の教育と文化』, 24-31
- 小林 真・庄司一子 1992 対人葛藤場面における幼児の行動—実演反応と言語反応の測定の試み—筑波大学心理学研究, **14**, 121-126
- Mize, J., & Ladd, G.W. 1988 Predicting preschooler's peer behavior and status from their interpersonal strategies: A comparison of verbal and enactive responses to hypothetical social dilemmas. *Developmental Psychology*, **24**, 782-788
- 中野 茂 1988 初対面の3歳児のやりとりの開始過程の検討 藤女子大学・藤女子短期大学紀要, **26**(Part II), 9-18

- Selman, R.L., & Demorest, A. 1984 Observing troubled children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, **55**, 288-304
- Serber, M. 1972 Teaching the nonverbal components of assertive training. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **3**, 179-184
- Shantz, C.U. 1987 Conflicts between children. *Child Development*, **58**, 283-305
- Shure, M.B. 1982 Interpersonal problem solving: A cog in the wheel of social cognition. In Serafica, F.C. (Ed.) *Social development in context*. New York: The Guilford Press Pp.133-166
- 高橋たまき 1987 遊びの発達 村山貞雄(編)『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査—保育カリキュラムの基礎資料—』サンマーク出版 Pp.533-614
- 内田伸子・無籐 隆 1983 幼児初期の遊びにおける会話の構造 お茶の水女子大学人文科学紀要, **38**, 81-122

—1992.9.30受稿—